千鳥会

はじめに

千鳥会という名前を聞くと思わず失笑してしまう人が意外と居るようである。実際の会の内情を少しでも知っている人にとって、千鳥足という連想が働くというのがそのひとつの理由であろう。確かに酩酊状態で賀茂川を素足で渡り歩くような豪の者も居る。構成メンバーが男だけであるから、酒という因子もクラブにとって必要不可欠なものである事も事実である。しかし、千鳥足イコール千鳥会という公式はあまりに短絡すぎる。

千鳥会という名前の由来は、その千鳥会の創設者にある。その創設者である横山正雄という人物は、東京の竹友社川瀬家にて琴古流を学び、「千鳥の曲」を愛して千鳥と号し、明治三十四年京都に来るやいなや琴古流尺八の集まりを創設し、千鳥社と名付けたといわれている。このように千鳥会という名前も歴史的重みを持った名前なのである。

ところで、前述の千鳥足という話題にもどろう。この千鳥足という言葉も、生態学的裏づけがあるのである。千鳥はある場所へ行くのに数歩あるいては立ち止まり、また数歩あるいては立ち止まるそうである。私達千鳥会も、前進と後退をくり返す毎日ではあるが、千鳥のようにいつかは目的地に到達することを信じてこれからも努力する次第である。

*　　*　　*

師走の足音が聞こえ始める季節、お忙しい中を御出下さった皆様には御礼の申し上げようもございません。千鳥会一同総力を出して、この会にのぞむ覚悟でございます。何卒最後までお付き合い下さって、御批判、御指導して戴ければ幸いに存じます。

今年は一昨年同様、能舞台での定演となりました。本日千鳥会がこのような会を催すことができましたのも、多くの皆様方の御助言、御協力の賜物であります。特に本日御賛助戴きました九州流三弦の山岸愛先生、京都大学吟詠部、京都女子大学箏曲部の皆様方には、心より厚く御礼申し上げ、また今後ともによろしく御指導の程をお願い致す次第であります。

昭和五十二年十一月二十四日　　**千鳥会一同**

琴古流尺八楽譜
楽書・尺八・各種附属品
株式会社　琴古出版社
〒530 大阪市北区浜崎町28番地　　電話０６（３７１）２３９４

＊PROGRAM＊

1. 千鳥の曲	尺八	池田静雄	市川邦道	上村公一
		広沢義晴	宮崎　晃	安田正明
		八木泰樹		
	箏本手	久保田恭子	小梶賀世子	中井伸子
	箏替手	石井貴美子	仲田純子	細野光世
2. ソネット	第一尺八	新階　創		
	第二尺八	冨山　実		
	第三尺八	高田長明		
3. 志図の曲	尺八	浜窪隆雄	堀田光一	増野　徹
4. 吟詠	吟詠	奥本忠伸	中川治夫	
	尺八	隅原祐嗣	山代裕彦	
5. 秋の曲	尺八	小林　隆		
	箏本手	坂田恵子		
	箏替手	中島あかね		
6. 鹿の遠音	尺八	岡本　弘	隅原祐嗣	
7. 尾上の松	尺八	山代裕彦		
	三絃	山岸　愛		

賛助出演

山岸　愛

京都大学吟詠部

京都女子大学箏曲部

＊MEMORANDUM＊

◆千 鳥 の 曲

この曲は名古屋の吉沢検行の作曲によるもので古今集の歌詞によった所謂古今組（千鳥、春、夏、秋、冬の曲）の一曲である。曲は雅楽調により前唄、手事、後唄の三段形式からなる。手事の中には、磯の松風・浪の音・千鳥の声・櫓の音等の擬音を巧みに響かせて、海辺の情景を表現している。この曲が祝いの曲とされているのは前唄（しほの山さし出の磯に住む千鳥　君が御代をば八千代とぞ鳴く）が、古今集の賀歌部にあるのと八代海軍大佐が明治37～８年の日露戦争で、仁川沖海戦に浅間艦上でこの曲を尺八をもって奏され、戦勝を得たことによるらしい。

いずれにせよ、わが千鳥会のテーマソングとも言えるこの曲。今年も一回生全員による演奏である。優雅に波間に飛び交う千鳥が、トンビやカラスにならぬかと、一抹の不安は残るけれど、若々しい演奏をどうぞお聞き下さい。

（前唄）　しほの山さし出の磯に住む千鳥　君が御代をば八千代とぞ鳴く　（古今集）
（後唄）　淡路島通ふ千鳥の鳴く声に　幾夜寝覚めぬ須磨の関守　（金葉集）

◆三本の尺八のための ソ ネ ッ ト

三木稔作曲。リネットとは14行詩のことであるが、ここでは小さな歌というほどの意味である。長菅のつぶやくような定旋律に導かれ、ゆったりと情緒豊かに曲は始まる。幾度か感情が高まるが、やがて消えていく……と突然の激しい感情の噴出、がそれも長く続かず緩やかな調子に戻る――後髪をひかれる様な気持ちを残しつつもつぶやきのうちに曲を終わる。所要時間わずかに５分30秒。本来、前後に速いテンポの楽章をもつソナタの第二楽章だったが、作曲者の意図で第一、第三楽章は削られた。短かい曲でありながら同じ旋律の断片が幾度も繰返される。それを生かすも殺すも演奏者の力量に委ねられているといえようか。大島渚監督の「愛のコリーダ」のバックミュージックにも用いられたこの曲、日本人の心の奥底のどろどろとした情念をいかに表現するかが課題であろう。

未熟者の二回生二人に四回生の大先輩を加えての三人組。実力の均衡失することはなはだしいが、そこは音楽に対する情熱で補いをつけるつもりである。ともかく我々は今までの練習の成果をこの５分30秒に凝縮する。緊迫の一時を味わってもらえれば幸いである。

御琴糸は

銘絃 金線印 菊 の 糸 と御指定下さい

ナイロン地唄糸も御愛用下さい。共に有名和楽器店にあります。

老舗 金善楽器店

◆志 図 の 曲

志津、又は賤とも書くが、サンスクリットでSiddhi－即ち成就の意味である。蔵訳によれば寂静集会のことで仏道を成就するために、仏弟子たちが、林の中において坐禅している様を表現したものである。一般に古典本曲は発祥を異にした様々の地方の寺々に伝わっており、博多一朝軒、京都明暗寺、伊豆竜源寺、仙台布袋軒等が著名で、この「志図の曲」は明暗寺流によっている。そして古典本曲は殆んどが仏道修業に関連したものであり、この曲も例外ではない。そこで我々三人の修道の成果は如何と云えばこの程度である。（恥かしいナァ！）

まだ余白が有る様なので三人のプロフィールを少し。見ての通り二回生とは思えない程フレッシュであるが、なんと三人の年齢を足すと67歳。一番年長の方はもう2□歳ながら、年齢を感じさせない頑張りで、かくいう筆者（一応最年少）も負けそう！

◆吟　　詠

楓 橋 夜 泊

張　継　　吟：奥本忠伸

月落烏啼霜満天
江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺
夜半鐘声到客船

楓橋（蘇州城の西七里にある楓の名所）のあたりに舟を泊めて一夜を明かそうとした。月は早や西山に傾き、烏が啼き、霜気は天に満ちている。岸辺の楓樹の紅と漁舟の灯が、眠気のさめぬ眠に入った。折しも姑蘇城外の寒村寺の鐘がひびいて来たので夜明けの鐘かと聞いてみれば、こはいかに夜半の鐘であった。

山 中 の 月

真　山民　　吟：中川治夫

我愛山中月　烱然掛疎林
為憐幽独人　流光散衣襟
我心本如月　月亦如我心
心月両相照　清夜長相尋

我は山中の月の輝いて疎らな林に掛かるのを愛する。月も亦隠士である我を憐むが為に光を放って我が衣襟に散るのである。畢竟、我が心は即ち月の如く月も亦我心の如く、心と月と両つながら相照らして、清き夜にいつまでも相尋ねようと、己の心の高朗なること月と同じであることを敍した詩である。　　見る人の心ごころにまかせおき　高嶺に澄める秋の夜の月

12畳のむさくるしい空間を千鳥会と時間帯によって棲み分けている吟詠部。これ迄は「時間ですよ」という一つの言葉によってかろうじて連絡を保っていたのだが、今年は何の使者が飛びたったか、吟の声と尺八の音が出会うことになった。思い出となる出会いとなればよいが……。

◈和楽器専門店◈

御琴、三絃、尺八 並びに 附属品

各種練習本取揃え、楽器別註製作も承ります。

老舗 金善楽器店

京・東山区大和大路四条下ル2丁目　TEL　(075)561-2940・541-1093

◆秋　の　曲

虫が鳴いている。
いまないておかなければ
もう駄目だというふうに鳴いている。
しぜんと涙をさそわれる。　　八木重吉

秋雨が激しく降る夜であった。闇の向こうから聞こえてくるのは木々を揺さぶる風の音と強い雨脚の音だけだった。昨晩まで毎晩鳴いていた虫の音もさすがにその夜は聞こえなかった。そのうち雨が少し弱くなった。丁度その時、微かな、まるで細い雨の間を必死ですり抜けるかのような蟋蟀の声が聞こえてきた。か細い、消え入るような声であった。秋の哀しみを全て背負ったような声であった。又雨が強くなった。しかしその強い雨の中から、思い出したように鳴く、その蟋蟀の声がずっと聞こえていた。夜半すぎ雨があがった。そして十六夜の月が顔を出す頃、あの蟋蟀の声だけが夜気を震わして響いていた。なぜか胸が熱くなるようなそんな秋の一夜だった。

月見ればちぢにものこそかなしけれ　我身ひとつの秋にはあらねど

作者は二代目吉沢検校である。彼は雅俗折衷の独特の古今調子をもって作曲された。その当時はあまり一般には親しまれなかった。そこでもっと賑やかな曲にすれば流行するだろうと考えた京都の松坂検校は、吉沢検校の死後、手事を入れ替手までもつけた。そのおかげで一般に広くひろまったと言われている。

◆鹿 の 遠 音

琴古流古典本曲。琴古流に伝わる本曲は、初代黒沢琴古（1710～71）が全国各地を行脚し、各地に伝わる尺八本曲を収集し、3代琴古の時、36曲に整理したものであるという。「鹿の遠音」は古典本曲の中では、「鶴の巣籠り」と並んで最もポピュラーな曲である。古い「琴古手帳」には曲名を「呼返鹿遠音」と書かれている。古典本曲の多くは宗教性にもとづいて作曲され、宗教儀礼に使用されたものであるが、「鶴の巣籠り」とこの曲とは宗教には関係なく、鳥獣の生態を描写し、親子や夫婦の愛情を象徴したものと解釈される。

奥山にもみじふみわけなく鹿の声きくときぞ秋はかなしき
やま里は秋こそことにわびしけれ鹿のなく音に目をさましつつ

紅葉のころ、深山で啼き交す雌雄の鹿の声を模して作られたと普通にはいわれるが、雌鹿は啼かないので雄鹿が二頭以上、それぞれ相手の雌鹿を慕って啼くさまであると解釈する説もある。

二人の尺八の掛け合いは、同じ旋律を繰り返しながら情感を深め、時おり混じるムライキという技法が鹿の鳴き声を連想させるといわれている。

真山銘尺八

〒560 豊中市服部豊町2-5-7　TEL　068-63-0564

永　広　真　山

◆尾 上 の 松

やらやら芽出たや、芽出たやと、唄ひうちつれ尉と姥
その名も今は高砂の尾上の松も年ふりて老の波も寄りくるや
この下蔭の落葉かくなるまで命ながらへて、なおいつまでもいきの松
ちえに栄えて色深し、峯の音かよ小松の風太平楽の調べかな

山陽本線、加古川駅（兵庫県）で下車すると潮のかおりに包まれた。そこから高砂線に沿って南の方へ歩いていくと、聖徳太子建立で有名な鶴林寺が見えてくる。更に道は新幹線、山陽電鉄を越え、尾上の町へと続いている。その町に松や朝鮮均鐘で有名な尾上神社がある。ひっそりとした町並みに隠れるような小さな境内である。昔、この辺りを我が物顔に茂っていただろう松も現在は数本を残すだけとなり、尾上の松も五代目が細々と生きのびている。加古川を隔てて、すぐ隣りの高砂神社とともに、尾上、高砂の松とうたわれた松の面影はいまやなかったが、誰一人いない境内で目を閉じていると、尉と姥(白髪の爺さんと婆さん）が「やらやら芽出たや……」と歌う姿が浮かんできたのは一人旅の感傷のせいだったのだろうか。

この曲は三味線の曲として九州でひかれた地唄であった。作曲者も作歌者もわからない。優れた曲であり、近年宮城道雄師の箏の手づけによって有名になった。歌は高砂、尾上の松の相生と永久に栄える齢を祝った非常にお目出度い曲である。お目出度い曲をお目出度い演者が演ずるには、はたして目出度し、目出度しといきますのやら。

あら面白や、とざさぬ御代に相生の松の緑
みどりも春くれば今ひとしほに包まさり、深くちぎりて
十歳経る。松の齢を今日よりは君にひかれて万代を春に栄えん
君が代は、万々ぜいと舞ひ唄う。

京都市左京区下鴨東塚本町10
喫茶・スナック 弾
☎ 721－5236

江戸前にぎり
すみれ寿司
《一皿４０円より》
左：百万辺西北角
中：裏寺町蛸薬師上ル
忘年会、コンパ御相談に応じます。

京大と共に歩む
理髪 美留軒
京大教養部元東門前 ☎771-2964

安い！ うまい！
末広食堂
左京区聖護院東町２ ☎771-4839

第18回定期演奏会

1977年11月24日

観　世　会　館

アンケート　　千鳥会　S.52.11.24

本日は御来場ありがとうございます。御手数でございますが、皆様の率直な御意見・御批判をお聞かせ下さい。

Ⅰ 年齢（　）　性別（♂・♀）　職業（　　）

邦楽の経験（有・無）　種類（　　）　年数（　）

Ⅱ 曲目についての感想

1. 千鳥の曲

2. ソネット

3. 志図の曲

4. 吟詠

5. 秋の曲

6. 鹿の遠音

7. 尾上の松

Ⅲ その他、お気付きの点がございましたらお書き下さい。

御協力ありがとうございました。
お帰りの際、受付へお渡し下さい。